

題目

「IUE・自己志向他者志向エゴグラム結果フィードバックシート記述文の理論的整合性と自己了解性」

著者

西川和夫（岐阜聖徳学園大学）

掲載誌

交流分析研究 2009年 第34巻第2号 121—124 ページ

分類

調査統計研究

問題と目的

日本テスト学会によるテストが満たすべき規準として、テスト結果の解釈が利用者や被検査者（以下受検者）にとって有効な意思決定に結びつくこと、そのために、各受検者の特徴が明らかになるような形でテストの結果が示されるべきであるという指摘がある。IUEは、自己状態の機能的モデルであるCPからACまで五つの機能的自己状態について、自己に対処する機能（自己志向自己状態：Iを付して表示）と他者に対処する機能（他者志向自己状態：Uを付して表示）の両面を測定できるように作成された質問紙エゴグラムである。検査用紙には受検者の自己理解に資するため、結果解説フィードバックシート（簡単ガイド）が併せてセットされている。本研究は、質問紙検査IUEの結果解説を行う簡単ガイドに記載された情報が、解説書「IUEハンドブック」に記載された理論と整合し、かつフィードバックを受ける受検者本人に対して、日本テスト学会が指摘するような規準に沿った妥当性を有しているかを検証する。

方法

＜調査対象者＞（1）調査1：心理学専攻者10名（常勤8名、非常勤1名、博士後期課程大学院生1名）。博士前期課程終了後の平均専門歴4.6年。専門領域は臨床心理学領域6名（臨床心理士）、社会心理学領域3名（大学教員）、パーソナリティ心理学領域1名（大学教員）である。（2）調査2：大学生。自己志向機能的自己状態ガイド記述文に対して159名（男74名、平均年齢18.4歳、女85名、平均年齢18.2歳）、他者志向機能的自己状態ガイド記述文に対して155名（男73名、平均年齢18.4歳、女82名、平均年齢18.2歳）。

＜調査実施手続き＞（1）調査1：心理学専攻者。調査対象者に、IUE検査結果解釈の根拠を示した「IUEハンドブック」、「IUE検査用紙」、「簡単ガイド」および「ガイド記述文の理論的整合性評価用紙」を郵送し、郵送により回答を得た。ガイド記述文の内容がハンドブックに記載された理論に整合し適切であると判断できる程度を、1点から4点までの4段階評価を求めた。（2）調査2：大学生。講義時間中にIUE検査用紙および得点エリアの特徴解説とそれに対する了解度を記載した「ガイド記述内容了解性評価用紙」を配布し、集団で一斉回答を求めた。検査用紙に対しては項目に当てはまる程度に

応じて3段階の回答を求めた。了解性評価用紙に対しては、検査得点に該当する自分の自我状態の機能的特徴に関するガイド記述文の内容が、自己理解を助けると思える程度について「とてもよくわかった」から「わからなかった」まで4点から1点までの評価を求めた。

結果

＜調査1：心理学専攻者による理論整合的妥当性評価＞ (1) 自己志向機能的自我状態に関して、専攻者が判断するガイド内容の妥当性評価平均値は、すべて「適切である」とする3.0を超えていた。(2) 他者志向機能的自我状態に関しても、同様に専攻者の妥当性評価平均値は3.0を超えていた。＜調査2：学生による自己了解的妥当性評価＞

(1) 自己志向機能的自我状態に関して、高得点エリアのガイド記述文の内容は「よく理解できた」と認知される評価値の3.0を超えていた。しかし低得点エリアの記述内容については「よくわかった」から「少しわかった」という評価の間にある2.5から3.1までのやや低い評価平均値を示す下位尺度が見られた。肯定的機能、否定的機能、アドバイスに関して、評価値の得点エリア間の差はすべて有意であった。(2) 他者志向機能的自我状態についても同様な結果であった。高得点エリアの記述文に対する評価はすべて「よくわかった」とする3.0を超えていたが、低エリアのそれに対しては2.7から3.1までのやや低い評価値に止まる下位尺度が見られた。高エリアの評価平均値と低エリアの評価平均値の間には肯定的機能、否定的機能、アドバイスのいずれについても明瞭な有意差が認められた。

考察とまとめ

＜理論整合的妥当性＞ 心理学専攻者による理論整合的妥当性の評価はすべて3.0以上であった。したがって、自己志向機能的自我状態についても他者志向機能的自我状態についても、ガイド記述内容は理論的な根拠を示すハンドブックの記載内容と適切な理論的整合性を持つと判断される。＜自己了解的妥当性＞ 自己志向機能的自我状態についても他者志向機能的自我状態についても、高得点エリアに該当するガイド記述文の内容すべてに対して、受検者は自分の状態を理解することに高い了解性があると評価していた。しかし低得点エリアの記述内容に対しては、否定的評価ではないものの評価平均値はやや低く、高得点エリアの記述内容に対する評価との間に有意な差が見られた。暗黙の自己像認知に関する先行研究結果と同様に、自我機能が亢進していると仮定される高得点エリアの自我状態特徴については、弁別的にも了解的にも自己該当性が高いと認知されているが、活性度が低い機能については、自己特徴として認知される程度が低くなることが示された。エゴグラムに関する文献では、得点が低い自我状態にあっても特徴的な肯定的機能と否定的機能が現れると説明されている。しかし今回と先行研究の結果を総合すると、活動性が低い自我状態の機能は、受検者にとり明瞭な自己特徴として認知されにくいことが分かる。低い得点エリアの検査結果フィードバックにも日本テスト学会の指摘にあるような高い了解性をもたらすためには、「当該の機能が積極的に活動していないという状態」が明瞭に自己認知されるような記述内容に改善される必要があると考えられる。

(要約者：西川和夫)